



充実した 学校生活のために

教育後援会会長
伊本 淳平



保護者の皆様におかれましては、いつも教育後援会の活動にご理解と多大なるご協力を頂き、誠にありがとうございます。

詳細は5月の総会にてご報告致しますが、平成28年度に於きましては、皆様より頂いた助成金、バザーの売り上げ共に過去に類を見ない額を達成できました。これもひとえに皆様(教育後援会役員も含む)のご協力のおかげであり、重ねて御礼申し上げます。

ここで教育後援会の設立目的を改めて申しますと「生徒への支援」に他ならず、もっと直接的に言えば皆様から寄付金(助成金、入学時に3年分一括で納入)を募り、一旦国庫に納付した後に全額を学校の運営予算として引き当てて頂くという仕組みを実行する「経済面の支援」であります。

本校の運営はすべて国からの交付金で賄われることになっていますが、生徒の皆さんがより良い高校生活を過ごすために必要な環境を整えるためには交付額だけでは十分とは言えず、不足分を助成金という形で保護者の方々のご厚意により補填して頂かざるを得ません。

こうして集められた助成金、また文化祭でのバザーの売り上げは、SSH、SGH活動、課題研究といった生徒が高度な専門教育を受ける為に必要な出費であったり、一方でプールのひび割れ補修や校外学習の引率教員への補填、更には

体育館への製氷機の設置など、生徒が安心して安全な学校生活を送る為に必要な支出としても幅広く有益に使われております。

私自身、本校機械科(当時)の卒業生ですが、当時「日本の工業高校」(祖母談)と称されてから数十年、今ではIT等、科学技術の進歩に追従する形で学校のカリキュラムも劇的に高度化して(まさか自分の子供がAuto CADや3Dプリンタなどを使いこなすとは思ってもみませんでした)おり、「世界でも有数の科学技術高校」へと進化した姿を目の当たりにして誇らしく思いました。また同時に、溶接、旋盤などの日本の技術を縁の下から支える昔ながらの基礎技能の履修も継続して行われている事に、世界に誇る日本の技術をリードする一流の技術者を育てる環境で子供を学ばせる事が出来、本当に良かったと思えました。

皆様からのご支援があつての教育後援会の活動ですが、生徒の皆さんを将来の日本を背負って立つ技術者、研究者、経営者に育成する為の一助となるよう、これからも日々精進していきたいと思っております。

教育後援会では庭園見学会やお料理教室などの、保護者同士の親睦の場も設けており、役員の方自身も楽しみながら企画しておりますので、機会がありましたらふっつてご参加頂きたいと思っております。(子供からだけでは得られない情報も保護者間で共有出来ます！)

今後とも教育後援会へのご理解ご協力の程、何卒よろしくお願い致します。



原美術館見学会報告

副会長 門馬 進



教育後援会の事業に庭園見学会があり、毎年開催され9回目となります。今年は、11月12日(土)に原美術館で行われましたので、ご報告をいたします。また美術館では写真家・篠山紀信の特別展が、同時開催されていましたので合わせてご報告します。

当日は、よく晴れ渡る絶好の日和となり、気持ちのよい見学会を催すことが出

来しました。場所は、JR品川駅から歩いて 15分程度。御殿山の坂を上り、旧三菱倶楽部の「開東閣」前から閑静な住宅街に 200メートルほど入った所です。住宅街に入った瞬間から雰囲気は一変し、建ち並ぶ高級住宅に羨望の気持ち



をもちます。その終点のように元大実業家の私邸を改造した原美術館に到着です。晩秋の午後、篠山紀信の仕掛ける妖しくエロチックな写真展「快樂の館」が我々を待ち受けていました。

午後2時に美術館入口前庭に集合しました。参加者は、伊本会長をはじめ小池顧問、仲道副校長先生、連絡係の今田先生、後援会の役員さん、保護者の皆様など合わせて約30名ほどとなりました。今回の見学会は、同時開催された展覧会が少々大人向けであったため、参加募集の案内に同趣旨を記載していましたが、参加者は例年より若干少なめでした。美術館前で会長の主催挨拶で見学を開始しましたが、これまでの庭園見学ほど空間が広くないので、午後3時に同場所に集合して解散する予定としました。

原美術館は現代アート専門の展示施設として、1979年



に開館しました。建物は原邦造(東京ガス会長、日本航空会長、帝都高速度交通営団(営団地下鉄) 総裁などを歴任した実業家)の私邸として1938年に建設されました。

設計者は渡辺仁(わたなべ じん)。上野の東京国立博物館本館、銀座の和光本館(旧服部時計店)、今はなき旧日劇等を設計した建築家の代表的作品。当時の建築家の目は、欧米に向けられていました。19世紀末から20世紀初頭の欧米建築界は古典的建築様式から近代的建築様式への転換期にあり、渡辺の作品も様式の混乱期にあたります。上野の東京国立博物館本館(1937竣工)は屋根は和風瓦屋根、その下の本体は洋風新古典主義の和洋折衷建築です。それに対してこの建物は、近代建築様式でグロピウスやル・コルビュジェたちが唱えた国際建築様式(水平屋根、白い壁、横長連窓、柱梁構造)を取り入れ、高い完成度を示しており、昭和初期の建築史を探る上からも貴重な存在となっています。

館長の原俊夫氏は、曾祖父に明治・大正を代表する実業家の原六郎、祖父に前述の原邦造をもつ家系の4代目です。現代美術に高い関心を持ち、海外のアートを愛する人々と交流を重ね、一点一点作品を自ら選択・蒐集し、この美術館を立ち上げました。またパトロンとして若手芸術家への

支援にも熱心に取り組みました。このようにして築かれたコレクションを展示する美術館ですから、展示作品と建物が一体となって、訪れる人を心地よく現代アートの世界に誘います。

特別開催されていた篠山紀信展「快樂の館」一は、氏自身のアイデアとして「ここ(=原美術館)で撮った写真をここに帰す(=展示する)」ということでした。以下、篠山のコメントです。



「美術館は作品の死体置き場、死臭充満する館に日々裸の美女が集う。美女たちの乱舞、徘徊、錯乱、歓喜、狂乱、耽溺……あらゆる快樂がこの館でくりひろげられる。幻蝶が舞う夢と陶酔の館。この祝祭は初秋の夜にはじまり、歳明け、厳冬の朝に散る。たった4ヶ月余の一度だけの狂宴。お見逃し無く。」

2016年篠山紀信

翻訳すると「写真展」といって、《よそ》=展覧会場とは別の場所で撮った写真を展示するのが通例だが、本展は違う。出品作品はすべて《ここ》=原美術館で撮影され、さらにプリントのいくつかは、まさに《撮影したその場所》の壁面に展示する。したがって、写真の中のイメージ=《かつて・ここに・あった》と、展覧会場にいるという現実=《いま・ここに・ある》が交錯し、幻惑的であると同時に、一種《倒錯》のときえ言える鑑賞体験になる。」

我々の集合した前庭の築地塀にすでに《そこ》で撮影された美女が控えめに迎えている。エントランスを入った所、チケットカウンター横の天井の高い控え室の2カットの写真が、展覧会主旨を忠実に表現していた。飛翔する等身大の裸女の横には今チケットをもらったカウンターの女性が写り込んでいる。もう一枚のカットには、美しい砂岩の暖炉に入り込んだ美女の写真と、その横の本物の砂岩暖炉。思わず写真と本物暖炉の岩1枚1枚の模様を確認してしまう。これは楽しい美の探検旅行となる予感を受ける。案の定、階段下の小空間に常設



展示された森村泰昌の作品とのコラボレーション。1階の大広間は壇蜜の空間。薄暗い夕闇の中、ポールデルポーを思わせる構図の中、彼女が原俊夫館長当人を「快樂の館」へ誘う。ふと窓の外を見ると、庭の茂みの向こう、灯籠の横に滲み出てきた妖精のような人影が見えます。さらにその先の裏門にも「快樂の館」の住人の姿が。2階に上がる階段にも《ここ》を意識させる妖精が舞っている。クロゼットを使った点滅する宮島達男の常設展示作品とコラボ。元子供室と思える部屋のピンク一色に塗られた壁には、ピン



アップのようにプリントが張り廻らされ奔放な少女妖精の部屋であることを示唆する。主寝室奥の元バスルームに常設された奈良美智の大きな目の少女とのコラボレーションも楽しい。昨年この企画で訪れた目黒の庭園美術館でも、元朝香の宮邸というお屋敷にスイスの装飾デザイナー、オットー・クンツリのアクセサリが各

室の壁や暖炉や窓台の上にさり気なく配され、とても自然な感じで見て回ることが出来ました。展示されている作品をただ見るのではなく、その中に入り込む体験ができたように思えます。篠山は「作品の死体置き場に幻蝶が舞う夢と陶酔の祝祭、一度だけの狂宴」と言い放った意味が少し理解できました。

幻蝶乱舞の陶酔を堪能し、三々五々集まってきた皆様と集合写真を撮り、伊本会長より締めのご挨拶をいただき、本年の庭園見学会を終了・解散しました。ありがとうございました。



プールの修繕について

副校長 仲道 嘉夫

教育後援会の皆様、いつも本校の教育をサポートして頂き、誠にありがとうございます。

本年は例年と異なり、ある物を”購入する”ということではなく、修理の代金として使わせて頂きました。実は、教育後援会総会の後、プール開き前に、本校のプールを確認したところ、プールに塗ってある、防水塗装が剥げかかっており、ぷっくりと膨らんだり、一部、その膨らんだところが破裂したところがありました。

特に、破裂したところがありますと、そこは鋭利な部分になり、水でふやけた生徒の足などがふれると、切れたりして大変危険な状態でした。本来でしたら大学に予算要求するという所ですが、予算要求の時期ではなく、通ったとしても、工事が夏休み明けになりそうなことから、緊急事態として、教育後援会からの助成金を使わせて頂きました。おかげさまで、無事、

プールの指導ができました。誠にありがとうございます。

このような緊急を要する修繕に関してはなかなか予算を確保することが難しく、このようなことに使用出来る助成金は大変有り難く存じます。今後とも、生徒の環境に注意を払っていく所存ですので、皆様方からのご後援よろしくお願いいたします。



弟燕祭バザー

弟燕祭(文化祭)期間中の10月15日(土)、16日(日)の2日間にわたって、恒例の「教育後援会主催バザー」を開催いたしました。今年度も皆さまからたくさんの品物をご提供いただき、お客さまも大勢お越しくださり、大盛況のうちに終了いたしました。今年度の売上金額は、これまでで最高だった昨年度を更に上回る242,865円でした。

品物を提供してくださった皆さま、当日購入してくださった皆さま、厚く御礼申し上げます。

これまでもバザーの売上金を活用し、除細動機(AED)の設置や、教材用の車椅子、レスキューセットの購入など、生徒の安全や教育活動に役立つ物を寄付させていただいております。今年度の売上金も学校と相談の上、活用させていただきます。



教育後援会だより 第18号 平成29年3月3日発行

東工大附属高校教育後援会 発行人 伊本 淳平

オフィシャルホームページ <http://tokodaihuzoku-koenkai.com>

印刷所 (株)あおむし Tel.050-5803-3564